

液状化するライフコースと「ソーシャルスキル」

—困難高校卒業生追跡調査8年目の結果から—

○中央大学 古賀 正義

【概要】

1 目的

低学力と非行問題を抱えた2つの困難高校（東京三多摩・宮城郡部、公立普通科）。8年前この高校を卒業した者たちは、離転職を繰り返しながら、いまではさまざまな職業（多くが非正規）に就き、仕事上での知識・技能の不足や家庭関係の急激な変質、地元地域での対人関係の欠如など多くの課題に直面している。とりわけ、アンダーグラウンドな接客業や「ガテン系」の肉体労働などに就いた若者たちは、液状化するライフコース（バウマン、J.）の只中で、格差社会の現実と格闘する日々になっている。もちろん、卒業生すべてが社会参加困難な若者ではなく、高卒時の就業を継続したり専門学校などを卒業後に就業して、常勤の「正社員」となっている者が4分の1程度おり、自らの家庭を持ち「親」となって子どもを養育している者も同程度いる。しかしながら、彼らの多くが対人関係や雇用の不安を口にし、「ソーシャルスキル」の獲得が必要と力説する。彼らに個人のコミュニケーション能力の歪みを問題の源泉とみなさせる言説の力とはどのようなものなのか、時系列的に分析する。

2. 方法（困難校「フリーター調査2011」）

本調査は、高校3年在学時（2003年度）から8年間にわたって5回の聞き取り調査を行い、進路先とそれを取り巻く対人関係・社会状況・家庭環境等の変化をつぶさに追いつけたエスノグラフィックな調査である。当初調査対象者は、東京55名、宮城31名であったが、今回2011年度調査では、東京15名（別にアンケートのみ返送4名）、宮城9名（男性3名、女性6名）であり、調査に参加経験がある約半数の継続実施者だけでなく、ニューヨーク在住者を含む4名が新規に参加した。調査は、アクティブインタビューの要素も加味しながら、最小限の構造化によって一人1時間半程実施した。

3. 結果（「ソーシャルスキル」の重視）

卒業後8年目に入ると、仕事では臨時嘱託採用による就業者が増え、家庭でも稼ぎ手の父親の退職が迫り、きょうだい結婚するなど大きな変化が襲う。多くの者が、この状況を踏まえて安定した就業の必要性を語るようになっていく。「（介護する親をみて）可哀想だなとか、手伝ってあげたいなって。（いつから？）たぶんニートを経験してからですね。色々気づいたんですよ、本当に。」（男性・郵便配達員）。こうして職場に適応するために必要な能力とは何かが、自己の社会経験の事例を通して物語られる。

その際、コミュニケーション能力の欠如が切迫して感じられないにもかかわらず、「ソーシャルスキル」習得の必要性が度々主張される。実際には働き方や場が違えばスキルの内容や必要性も変わってしまうが、これまでの就労体験と関連づけてスキルが意識化される。例えば、医療事務職員からキャバクラに転じた女性は、前職のために専門学校で習得したマナーなどのスキルアップ講習が役に立たなかったことと対比して、現職では気持ちと外に出す態度が分離できるような感情労働が可能になったと誇らしげに語っていた。「（病院と）違いますけど、（ここで）やってたおかげで、なんかこう別に笑わなくても笑顔が出たりとか。なんか怒ってる、あたし今いらついで。けど、笑ってるみたいなのとか。」

5. 結論

このように職業経験の問題化過程を通して、「ソーシャルスキル」獲得の自己物語が構築されやすい。「大人になる」ための職業的自立の意味づけも、この経験知を通して変化する。超個人化した彼らの意識の中では、こうした語りは社会問題を自己責任で解決した軌跡と解釈される。詳細は当日報告する。（拙稿「フリーターにとっての「職業的能力」とライフコースの構築」本田編『転換期の労働と能力』2010、「将来の私を物語る」北沢編『教育を社会学する』2011、「ソーシャルスキルとは何か」『現代思想』2013年4月号等）